

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

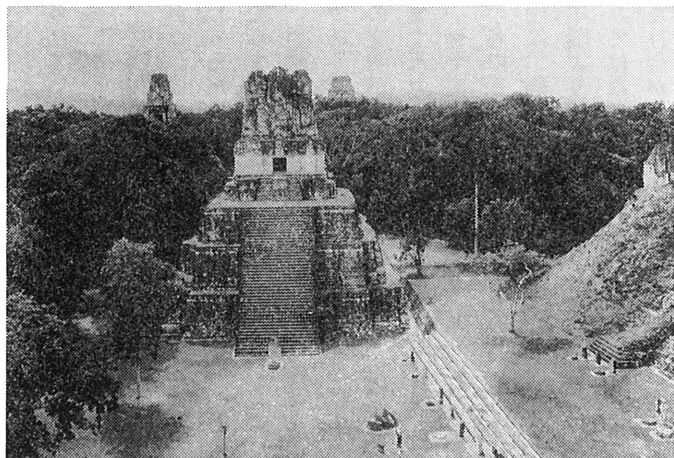
マヤ興亡：文明の盛衰は何を語るか？

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5663

第三章 文明の勃興

マヤ文明は、いつごろから、どこで栄え始めたのであろうか。これは文明とは何かという定義の仕方であわてくる。人間をとりまく有形無形の人工物と人間とで形成されるシステム、すなわち、人間・装置系という定義に従うと、紀元前ずっと以前ということになる。私自身は、現在遺跡のあるところに人が住み始めた時から現在までが、マヤ文明の研究の対象になると思つてゐるが、しかしマヤ文明の特徴の一つに、文字が挙げられる。文字をもつた時が文明の初めといわないまでも、その時期はある一つの高みに達した時期であることはまちがいない。それを一つの基準とすると、西暦二五〇年頃ということになる。これまで発見された文字をもつた石碑で一番古いものは、ティカルという遺跡の、石碑二九号が記していた二九二年である。しかしそこに刻まれている文字はすでに発達した形態を示していることから、少なくとも二五〇年頃には文字は使われていたとみることができるといふ。実際は紀元前後にさかのぼることが明らかになりつつあるが、二五〇年はある一つの高みの始まる時期であるとしてまちがいない。それからマヤ文明の崩壊の九〇〇年または九五〇年までを、マヤ学ばかりでなく、メソアメリカ考古学では、古典期と称している。

古典期の前は先古典期、または形成期といつてゐる。それはだいたい紀元前二〇〇〇年頃か



写2 ティカルの遺跡の神殿II号(後方左はIII号、右はIV号)

ら始まる。その初めの時期を画するものは、土器をもった定住生活である。それが始まるのが、だいたい紀元前二〇〇〇年頃で、場所は以前の英領ホンジュラス、現在のベリーズの北部である。

古典期の後は後古典期と称する。低地南部の文明が崩壊したあと、すなわち、十世紀からスペイン人の征服までをさす。

マヤ文明の勃興

つい最近まで、マヤ文明は三世紀末に突如として現われ、九世紀末に忽然と滅び去ったと信じられていた。突然の勃興と崩壊という不思議さに加え、マヤ人は熱帯ジャングルのなかで時の計算に没頭して平和に暮らしていたという説が流布していたため、マヤ文明は世界でも稀な、不可思議な文明とみられてきた。その不思議さ

を説明するために、アトランチスや宇宙人が登場するのであるから、学問の真面目な対象とみられていないのではなからうか。

しかし一九六〇年頃から、これまでの考えを改めなければならないような発見が相次ぎ、マヤ文明も「世にも不思議な文明」から、世界の諸文明とかわらない文明になりつつある。人間がこしらえた文明であり、もはや宇宙人が登場する余地はない文明なのである。同じ人間がこしらえたのであるから、他の文明と同じような経過をたどるのは当たり前の話であるが、それでもまだ不思議さのほうが勝っているようである。もちろん、マヤ文明にはまだ解決のつかない問題が数多くある。マヤ文明に独特な特徴もある。しかし我々と同じ人間がこしらえた文明であり、決して特異な文明に祭りあげてしまつてはならない。歴史の教科書にエジプトや中国の文明が取りあげられているように、マヤ文明も同じように取りあげなければならない。いつまでもロマンの対象であつてもいいが、同時に学問の対象でもなければならないのである。

マヤ文明の絶頂期である古典期に先立つ時代は、先古典期、または形成期と呼ばれるが、その名のとおり、古典期に先立つ時代、または古典期を形成する時代と考えられてきた。その時代は、農業に頼つたみすぼらしい村が散在する社会とみられていたのである。しかし一九七五年頃より、これまでの考えを改めなければならない発見が相次ぎ、単に古典期に先立つ時代とみてはならないことがわかつてきた。すなわち、形成期にすでに文明といつていいほど、複雑な社会ができていたのである。そのため、形成期とか古典期という術語は、それに込められた

第三章 文明の勃興

グレゴリウス暦	放射性炭素測定年代	マヤ長期暦	時代区分			
1500			後古典期	後期		
1300	1300a.d.	11.10.0.0.0.				
1100		11.0.0.0.0.		前期		
900	900	10.10.0.0.0.	古典期	後期	末期	
700		10.0.0.0.0.			後期	後期
500	500	9.10.0.0.0.		前期		中期
300		9.0.0.0.0.				前期
100	100a.d.	8.10.0.0.0.	形成期	後期	(原古典期)	
100		8.0.0.0.0.				
100	100b.c.	7.10.0.0.0.				
300		7.0.0.0.0.				
500	400					
700				中期		
900	700					
1100						
1300	1000					
1500						
1700						
1900	1500			前期		
2100						
2300						
BC 2500	2000b.c.		古期			

表8 マヤの時代区分

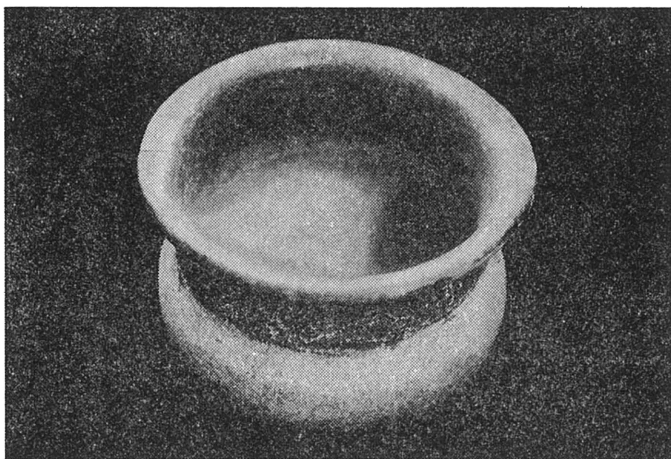
意味にそぐわない時代区分名となつてしまつたといつてよい。しかし、それらの言葉はいまでも好んで用いられており、そのため単なる時代を区分する名という見方をしてほしい。

形成期時代の研究があまり進んでいなかった一九七五年頃までは、この地にマヤ文明の先祖ともいえる人々が住み始めたのは、紀元前九〇〇年頃とみられていた。しかし現在では、約一万年前の氷河期の終わり頃には、グアテマラ高地にも、低地のジャングル地帯にも人々が住んでいたことがはっきりしてきた。マンモスなどの大動物の狩猟に用いられたクロビス型に似た打製投射石器が、ベリーズやグアテマラ高地で発見されたからである。

そうした大型狩猟採集移動生活から農業定住生活への移行が徐々に進行し、やがて土器をともなう定住生活が始まつた。それまでをふつう古期といつている。

形成期前期

土器がはじめて現われた年代は、放射性炭素年代測定法によつて推定できる。ベリーズ北部のクエリヨで発見された資料の放射性炭素年代測定法による年代は、紀元前二五〇〇年であつた。その頃から土器を伴う形成期が始まるということになる。しかし、その年代には疑問をもつ人がおり、はたしてそこまでさかのぼれるかどうかは、いまのところははっきりしていない。しかし、ペテンのヤシユハ湖からのトウモロコシの花粉分析は、紀元前二〇〇〇年という測定値をもち、その頃にはトウモロコシや豆、唐辛子などが栽培されて、土器をもつた定住生活が



写3 スワジー土器(ペリーズ国立考古学研究所蔵)

始まっていたようである。おそくとも一五〇〇年頃には、土器をもった定住生活が、ペリーズはもとより、ユカタン半島北部などで始まったことは認められている。

住居は、しつこい基壇をこしらえ、それに穴をあけ、柱を立て、しゆるで葺いたものであった。最初の土器はスワジー土器と名づけられているが、いろいろな色や形をもち、最初の土器とは思えないほど、すでに洗練されていた。そのため、エクアドルやコロンビアなど早くから土器を作り始めていた地域との交流を考える人がいる。

メキシコ湾岸低地にオルメカ文明が栄える以前、すでにマヤ地域では、東のペリーズばかりでなく、北ではマニに、西ではチョンタル平原、南ではチアパス高地や太平洋岸に、土器を用い、農耕生活を行なう人々がいた。しかしの

ちにマヤ文明が絶頂期をむかえるマヤの低地では、紀元前一〇〇〇年頃、やっとパシオン川流域に土器製作者が現われるにすぎない。最初に住み始めた人は数が少なく、しかも散らばっていた。

形成期中期

形成期中期は、紀元前一二五〇年頃より前四五〇年頃とされたり、前九〇〇年頃より前三〇〇年頃までとされる場合があったりで、意見は一致していない。しかしこの時代は、メソアメリカ最初の文明といわれるオルメカ文明が、タバスコ州からベラクルス州の沿岸で栄えた時代でもある。

紀元前九〇〇年頃には、パシオン川の流域のアルタル・デ・サクリフィシオスやセイバルなどにも人が住み始めるようになる。それをシェ土器文化という。シェ土器は、テコマテと呼ばれる丸い壺や、器壁が外側にそった、鏝をもつ器縁の皿が特徴的なものである。スリップ懸けのない単色土器で、刻文や押文があることがある。それらは形成期中期初頭のチョンタル平原の土器とよく似ている。トゥリニダードのチワーン相が両者をつなぐようで、そのため、チョンタルパウスマシオンタ↓パシオンという流れが推定されている。グアテマラ高地からサルバドルにかけてが、シェ土器のもう一つの供給源である。グアテマラ高地のエル・ポルトゥンやサカフット、太平洋岸のバラ相やオコス相、メキシコ湾岸のオホチ相、バヒオ相、モリー

ナ相の土器とも類似している。形成期前期から文化的連続がみられるのである。

オルメカやチアパスには発達した社会があったが、マヤ低地ではシェ土器やエブ土器文化の遺跡は、のちの文化の下にみつかるだけで、規模は小さいうえに、少ない。そのため最初にペテンに住み始めた人は少数で、散らばっていたと考えられる。地面に直接か、低い人工基壇の上に木の家を建てていたらしく、公共建築物の証拠はない。おそらく階層のない、農耕社会であったのであろう。

紀元前六〇〇年頃には、以後マヤ文明の中心となる、内陸部のティカルやワシヤクトウンなどでも人が住み始めるようになる。村落は拡大し、交易が広まった。交易品と考えられるのは、黒曜石や翡翠などであり、黒曜石はるか離れたグアテマラ高地よりもたらされ、翡翠はモタグア川中流域からもたらされた。土器からいうと、シェからマムムに変わり、製作の均一化、標準化の傾向がみえてくる時代である。

一方北のユカタンは、中央部とは連絡が少なく、孤立した地方色をもった時代である。贅沢土器はなく、まだ小さい村のレベルにすぎず、公共物はまれで、あっても小さい。しかしノホツチ・エツクでは、小さな基壇が切り石で石灰を塗りこしらえられた。またツビルチャルトゥンでも、人手を必要とする基壇建物が建てられた。

形成期後期

形成期後期は、農耕村落という段階とは異なった社会が出現した時代である。文明には盛衰がつきものであるが、盛衰を波にたとえると、最初の大きな波が押し寄せた時代だといってもよい。遺跡の中心部には広場とピラミッドが建てられるようになる。それは単純な社会を越え、人々を支配する階級が出現したことを意味している。文明がマヤ地域にも発生したといつてよい。

形成期後期の土器は、チカネル式土器といわれる。その特徴は、表面が蠟のような輝き(waxy surface)をもち、色はふつう赤、黒、クリーム色の単色である。二色土器もあり、のちに多様化する。マムム式土器から発達した土器といわれ、非常に標準化してくる。

人口が増大し、町の数が増え、かつ大きくなる。最初の大きな儀式センター建築の出現した時代である。海岸地域から貝や赤エイの骨、グアテマラのモタグア川中流域から翡翠、といった交易品がもたらされ、墓の副葬品に差がみられるようになり、階級差がはっきりし始める。同時に、地域差が顕著になる。人口の増大、儀式センター建造、エリート層と一般層の乖離の時期とペースに地域差がみられる。

この時期、全体的に見ると、人口が飛躍的に増大したらしい。たとえば、ベリーズの北のコロサル地区やオレンジ・ウオーク地区のココス・チカネル期では、前のマムム時代に比べ人口が四倍に増したと推定されている。

人口の増大が直接政治力の発展に結びつくわけではないが、急速な人口増加は、政治力ばかりか、経済力の増大にも寄与したことはまちがいないであろう。かなり管理能力の優れた支配者層の出現を予想させる。生産規模もそれまでとは異ならざるをえない。中米ではミルパ農業として知られている焼畑農業に、集約農業を加えなければ、人口を養えない。土地を改良して、たとえば大規模な段々畑をこしらえたり、盛り土、灌漑農業は、支配者がいなければならぬ。社会の組織化をはかる支配者が生まれたにちがいない。

中央部のティカルでは、後期の初期のチュエン期に人口が増大する。しかし後期の後半であるカワック期では、人口の停滞、または衰退がおこる。公共物が建設され、擬似アーチをもつ墓が建設される。翡翠や貝殻、赤エイの骨などの贅沢品や儀式装具が埋葬されており、貴族層が出現したにちがいない。墓に埋葬された成人男子の体格は、墓以外から見つかった骨より大きくすぐれており、世襲の支配者層が存在したと考えられる。

パシオン川のアルタル・デ・サクリフィシオスでは、人口が増大し、儀式建築が洗練されてくる。

北西地域のパレンケやトゥリニダードでは、チカネル土器はかなり大きなマウンド建造物と関係している。

ユカタン北部のコムチェンでは、三千人から五千人の人口を擁する町が紀元前四〇〇年頃に出現したらしい。中心部は五つの大きな基壇が八〇メートル×一五〇メートルの広場を囲んで

いる。二つの基壇は細長く高いもので、三つは広く低いものである。サクベといわれる連絡道路もあった。

ツビルチャルトウンでは、ティカルと似て、コムチェン期（紀元前二五〇年～紀元前一〇〇年）に文化的にピークに達したようである。コムチェンの土器はチカネルと関係があるが、異なる。次のシュクルム期（紀元前一〇〇年～紀元後二五〇年）には人口は減少し、公共物の建造が停止する。その他の遺跡では停滞は明らかではない。

リオベック地域では、パクルウム初期（紀元前三〇〇年～紀元前五〇年）に人口が増大したが、大建築はない。後期（紀元前五〇年～紀元後二五〇年）になってはじめて大建築が建てられるようになる。

ベリーズのクエリヨでは、千人を越す人がいたと思われる。広場の中心には浅いくぼみがあり、そこには十人を越す若い男の殺された死体が投げ込まれていた。副葬品としては、土器のほか、彫刻を施された骨も見つかった。

コルハでは、石斧や手斧などの石器の道具がこしらえられていた。六平方キロのなかに千余りの建物があり、そのうち八九が石器工房だとみられている。そのうち少なくとも三二は形成期後期に活動があった場所である。毎年、手斧は三千ほど作られたと推定されている。半径四〇キロの範囲にそれらの道具は流通していたが、一六〇キロも離れたところにもまでもたらされてくる。

大建築や防御壁、水路などは、古典期に発達したと考えられてきたが、すでにそれは形成期後期には始まっていた。たとえばベリーズ北部の半島の沿岸にあるセロスという遺跡では、二〇〇メートルにも及ぶ水路が建設されている。それは紀元前二〇〇年から五〇〇年の間に造られたことが確認されているが、幅は広いところで六メートル、深さは二メートルもある。ユカタン半島北西部カンペチェ州のエツナという遺跡では、一二キロメートルにも及ぶ大規模な水路が建設されている。南ではチャンポトン川に結ばれ、北では濠に囲まれた複合体と結びついている。

ラマナイの巨大な建物 N 10—43 は三〇メートル以上の高さのピラミッドで、三つの小さな神殿が頂上にのっている。ティカルでも「失われた世界」と名づけられた区域では、巨大なピラミッドが建てられている。ペカンでは円周が一九〇〇メートルにも達する防御濠が造られた。これらの建造物は、それを造るための支配階級の出現なくしてはできないほど巨大なものである。

さらに、これまで見つかったているなかでもっとも規模が大きいとされているエル・ミラドルも、形成期後期（紀元前二五〇年〜紀元後一五〇年）に栄えたところである。中心部の一〇〇メートル×八〇〇メートルの範囲のなかに建物が密集している。そのなかでも際立つのが、エル・ティグレとモノスと呼ばれる巨大な建物である。エル・ティグレの高さは五五メートルで、それを建てるためには二五万立方メートルの土が必要だったと計算されている。その頂上

にたつ三つの神殿は、三角形に配置されている。そしてエル・ティグレの南にある建物三四（ティグレの神殿）の壁面には、二メートルを越える巨大なジャガーと人間の混淆した仮面が見つかった。黒と赤、それにクリーム色の色が残っており、美しく彩色されていた。赤と黒の色は形成期後期に最初に現われるのであるが、それは以後、東と西を表わす色、ひいては誕生、生成と、死、暗黒をあらわす象徴として使われるようになる。そのはしりが形成期後期にみられるのである。ジャガーと人間の混淆した大仮面は、オルメカの影響にちがいない。同種の仮面は、ワシヤクトウンやティカルといった中心部ばかりか、ベリーズのセロスやラマナイでも見つかっている。

エル・ティグレの南にあるモノスは、高さ四〇メートルもある巨大な複合体である。エル・ティグレやモノスなどのたくさんの建物や広場がある場所は、それを仕切る壁で囲まれていた。遺跡の南と東側には全長一二七〇メートル、高さ四〜六メートルの壁があり、北と西側は幅五〜六メートル、深さ二・五メートルの溝と急斜面になっていた。防御システムの完備した遺跡といつてよく、高度な政治的集団がその頃すでに存在していたことがわかる。中央アクロポリスの西端は、貴族層の住まいだったらしく、中庭を囲む建物のそれぞれの部屋は、きれいに形を整えられた切り石でこしらえられ、しつこいが塗られ、赤の色が施された美しいものであった。

これまで細長い建物は宮殿で、貴族層の住まいとみられ、それらは古典期後期になって増え

始めたと考えられてきたが、そうした建物が、すでにエル・ミラドールで見られるのである。ペリーズのノフムルでも、同じような建物が、少なくとも三つ確認されており、貴族層がすでに存在していたとみても、もはや問題はないであろう。

エル・ティグレやモノスなどがある地域から二キロほど東には、エル・ミラドールで最大、おそらくマヤ地域でも最大と思われるダンタと呼ばれる建造物がある。四五メートルほどの高さで、南北の長さは三〇〇メートルもある。エル・ティグレから、ある年の夏至の日に眺めると、木星、水星、火星、土星のすべてが、ダンタのピラミッドの上から出るようにみえたという。紀元前から天体の動きにあわせて建造物の配置を考えていたらしいのである。

この中心部からはいくつかのサクベと呼ばれる道のびている。この巨大な都市とそれを支える町村とを結んでいたのであろう。一つは二キロ南西のティンタルにつながっているし、二キロ南東のナクベともつながっている。そうした周辺の都市から農産物をはじめ、さまざまな品がこの巨大都市に流れ込んだにちがいない。海の貝殻や火山性の石や灰などが確認されている。周辺にはバホと呼ばれる湿地があり、おそらくそれを利用した盛り土（チナンバ）農業が行なわれていたにちがいない。

建造物の配置、規模、芸術とその図像、天体への関心など、マヤ文明の絶頂といわれる古典期にみられる特徴が、すでに形成期後期にすべて出現している。ただ欠けているのは、文字だけである。しかしその文字も形成期後期後半にはぼつぼつみられるようになる。セロスで見つ

かった印章には点と数による表記らしいものが刻まれているし、それと同時代の一〇〇年頃とみられているポモナの遺跡から出土した耳飾りや、ハツツカブ・ケエル出土の儀式用の斧をはじめ形成期後期の作とみられる文字を刻んだ工芸品が多く見つかっている。一九八五年に発掘されたベリーズのキッチパンハの遺跡から見つかった骨には、少なくとも八つの文字が刻まれている。これは紀元前一〇〇年から紀元後一五〇年の形成期後期のものとされる。ハウバークの石碑といわれるものには文字が二八も刻まれているし、エル・ポルトウンの記念碑一号やエル・トラピチェの記念碑などの石にも文字がみられる。ないのはマヤの長期暦という日付表記だけといってもよい。それが現われるのは、二九二年であり、それを期して古典期と称している。しかし、その日を刻むティカルの石碑二九号でさえ、おそらくそれより前の日付を刻む石碑があることを予測させるに足る十分発達した文字の形態である。石碑建立の儀式は紀元前後にはすでに始まっていたようであり、エル・ミラドルやクエリヨの遺跡では、彫刻は施されていないが、その時代と思われる石碑や祭壇が発見されている。古典期の始まりを二五〇年とする意見が大勢を占めてきたが、文字が現われた時期を古典期とするなら、少なくとも一五〇年頃としなければならぬであろうし、実際にはそれ以上にさかのぼらなければならないであろう。

形成期後期の後半（紀元前五〇年〜紀元後二五〇年）は原古典期ともいわれる。古典期マヤ文明の要素がほぼ現われた時期である。形成期後期の絶頂期と古典期前期をつなぐ移行期であり、



写4 ワシヤクトゥン：E-VII-sub

建築様式、土器の装飾、墓の副葬品、その他の点からも明らかなように貴族層の出現が顕著に現われる時代である。

多色のしつこい塗りの大仮面をもつ神殿や、擬似アーチを使った墓が建てられるようになる。神殿複合体が生まれ、また多色土器がつくられ、文字の原形も現われ始めた。

土器は、乳房型の四脚土器が特徴的である。ウスルタン・レジストまたはそれをまねた陽画 (positive painted) がみられる。これは、フロラル・パーク式土器 (ホルムルー土器) と呼ばれており、サルバドールからもたらされたと考えられている。オレンジ単色、オレンジ生地に赤と黒の多色土器 (Ixcantio) もみられる。

ペテンとベリーズ境界にあるホルムルーやベリーズ溪谷、コロサルIIオレンジウオーク地区ではフロラル・パーク式土器が存在する。しか

しすべての遺跡で存在するわけではない。

ティカルにもフローラル・パーク式土器は存在する。しかし人が流入したといえるほど多くはない。人口が増大せず、建築活動も増えない。墓と神殿の壁面に、イサパ様式がみられる。ワシヤクトウンではフローラル・パーク式土器はティカルより少ない。スタッコー製の壁飾りがみられるE—M—subといわれる建物は、四角形で、四つの階段をもち、壁面にスタッコー製のジャガー人間がつけられているが、これは、秋分と春分を測る天文学的に配置を考えられた建物だという。この種の建物は、ティカルやナアチトゥン、ラ・ムニエカなど、二〇以上の遺跡で確認されている。

パシオン川流域でもフローラル・パーク式土器はある。セイバルではカントウツエ期の後半に人口が減少し、建築活動が停止する。北西地域では原古典期土器は存在するが、まれである。リオベックや北平原には存在しない。

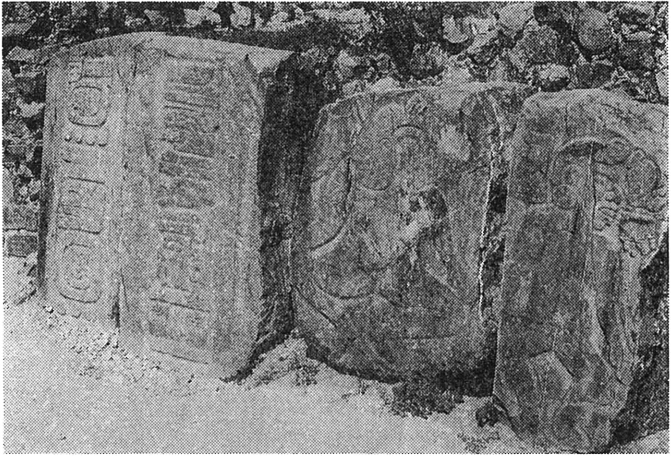
マヤ地域の外

紀元前一五〇年から九〇〇年にかけてサン・ロレンソで、それ以後紀元前四〇〇年頃までラ・ベンタを中心に、いわゆるオルメカ文明が栄えた。形成期中期は、オルメカの中心地であるタバスコ、ベラクルスの低地からテワンテペック地峡をとり、グアテマラの太平洋岸にいたる沿岸低地帯が高い文化をほこっていた。マヤ地域にも人が住みつき、活動が始まるのであ

るが、マヤは辺境にすぎなかつたといつてよい。マヤが栄えるようになったのは、そうした高文化地域からいろいろなものを取り入れたからとみることがができる。その流れをたどると、オルメカ（紀元前二二〇〇年～前七〇〇年）→汎オルメカ（前七〇〇年～前二〇〇年）→イサバ（前二〇〇年～紀元後二〇〇年）→マヤという道筋を想定できる。イサバ期の後期には、イサバよりカミナルフユのミラフロレスとよばれる時代の影響のほうが大きく、イサバというよりミラフロレスといったほうが適切かもしれないが、ここでいうイサバとはイサバだけではなく、カミナルフユを含む太平洋岸一帯の高度な文化を代表したものをさすことにする。イサバの前は汎オルメカまたは後オルメカ期ともいう時代であり、メキシコ高原のチャルカツインゴ、オシユトテイトランなど、チアパスのシヨクヤピヒアパンなど、サルバドールのチャルチュアパなどにオルメカのな浅浮き彫りを主特徴とする芸術様式が栄えた。このころはオルメカ中心地はむしろ受け手になってしまった。

紀元前五〇〇年少し前には、オアハカのサン・ホセ・モゴテ、続いて、モンテ・アルバンに、暦や文字が現われた。踊る人と名づけられた不思議な動きを表現した様式は沿岸地帯にも現われる。これは最近では、征服された人を表わしていると考えられるようになった。

紀元前後あいついで線と棒による暦が現われた。チアバ・デ・コロソの石碑二（紀元前三六〇年）、トゥレス・サポテスの石碑C（紀元前三二〇年）、エル・バウルの石碑一（三七〇年）、アバツフ・タカリックの石碑五（二二六年）、ラ・モハーラの石碑一（一四三年／一五六年）、トゥシユ



写5 モンテ・アルバン：石碑12・13号と「踊る人」

トラの小像（一六二年）などに、のちのマヤ長期暦の先駆けとなる暦が現われた。文字も沿岸地帯に広くみられるようになった。

イサパやカミナルフユの石彫類にみられる長鼻の神や、上から見下ろす身体をもたない頭、石碑の上部で羽を広げた大神話鳥、U型モチーフ、渦巻模様、石碑と祭壇の組み合わせ、浅浮き彫りの技法、帯に飾られた頭や三つの下げ飾りなどがマヤの芸術のなかに受け継がれた。

それらがマヤ低地に伝わった道の一つは、ベリーズ経由であった。それは、サルバドルとベリーズのフローラル・パーク式土器と呼ばれる乳房形の四脚土器や多色土器、Z型の器壁の皿などの比較から明らかである。パシオン川を伝った西の経路も考えられる。もちろんこれだけではない。北からの流れもあったことは、ロルトゥン洞窟にみられる文字からも否定できな

い。最近のエル・ミラドールやナクベの発掘から、イサパより前に、すでに、イサパを越えるほどの規模で、ペテン北部地方で、活動が始まっていることがわかった。それらの衰退とペテン中央部のティカルやワシヤクトウンの勃興が重なるのである。

外部からの影響を受け入れるだけの成熟した社会にマヤ自身がなっていたことがはっきりしてきたのである。神殿として機能したと思われる建物、形成期後期までにはすでに建てられているし、のちに建築に用いられたマヤ式の擬似アーチも墓に用いられた。古いピラミッドの上に新しいのを建てかえていくうちに技術を向上させ、洗練させていった。そうした建築を指揮する神官階級が形成期後期には出現していたことは明らかである。力の集中化に宗教の果たした役割も大きかったはずである。すでにオルメカ時代に、個人の強調とともに神々が石彫類に現われている。また、塩や黒曜石、ひき臼用の固い石などの必需品が欠けていたため、交易を支配する人々が富を得、力を得たと思われる。人口増大にもない、水の支配、管理や土地を求めて争いがおこったり、農業の集約化や技術が向上し、専門化、階層化が一層すすんだものと思われる。それらが文明をおこす力になったにちがいない。こうした自律的に成熟した社会に外部からの影響が作用し、大文明が勃興したにちがいない。サルバドールで、二〇〇年頃火山の大爆発があったことも見逃せない。文化の先進地帯である沿岸低地帯からたえず進んだものを受け入れていたはずであるが、火山の大爆発はかなり急激な変化をマヤ地域にもたらしたにちがいない。乳房形の四つの脚のついた土器や多色土器はサルバドールの人々によっても

たらされたと考えられているし、文字もその経路をつたってきた可能性は大きい。

形成期は、長い間、古典期の準備期間とみられてきた。しかし形成期は、むしろ一つのピークをむかえた時代であり、その後期または原古典期は、文明の一つの波が去り、新しい波がおしよせ始めた時期というほうが適切であろう。